

細見コレクションの漆芸
根来 NEGORO
— 朱と黒のかたち —

木の強さとしなやかさ、漆の鮮やかさと渋味、使い込まれた美のかたち。

実用から生まれた「根来」は、木と漆の特性を最もよく活かした器といえます。

中世に紀州・根来寺で作られた飲食器や什器に始まるとされる根来塗は、用途に適した簡潔なフォルム、長年の使用に耐えうる堅牢な造り、明快な色彩〈朱と黒〉が特徴です。

漆を塗り重ねた丈夫な器の表面は、経年によって上塗の朱漆が擦れて中塗の黒漆が現れ、味わい深い塗肌となります。近代には、この塗肌の景色に魅せられた数寄者たちによって「根来」は華麗な時絵とは対極を成す漆芸の美として注目を集めることとなりました。

本展では、細見コレクションの創始者である初代古香庵（1901～79）が、自ら『根来の美』（1966年）を著すほど情熱を傾けて蒐集した「根来」を一堂に紹介します。

— 展覧会要綱 —

1. 展覧会名称 「細見コレクションの漆芸 根来 NEGORO— 朱と黒のかたち—」
2. 会 期 2022年2月10日(木)～4月10日(日)
3. 開館時間 午前10時～午後5時（入館は午後4時30分まで）
4. 休館日 毎週月曜日(祝日の場合、翌火曜日)
5. 入館料 一般 1,300円 学生 1,000円
6. 主催 細見美術館 京都新聞
7. 会場 細見美術館 京都市左京区岡崎最勝寺町6-3
<http://www.emuseum.or.jp>
11. 本展連絡先 細見美術館 TEL: 075-752-5555(代) FAX: 075-752-5955(代)
広報担当 大塚 kouhou@emuseum.or.jp

新型コロナウイルス感染拡大防止のため、ご入館および施設のご利用にあたってはマスクをご着用ください。また、急激な状況の変化により、止むを得ず会期・営業日時等を変更する場合があります。詳しくはホームページをご覧ください。

— 主な出品作品 —



亀甲文瓶子 室町時代 細見美術館蔵

本来神前に酒を供えるための器で、一对として使われたものの一つと考えられる。

中塗の黒漆が手擦れによって見え隠れし、朱と黒が強く引き合い、凶らずも一つの器の経てきた年月の重みを醸し出す。細く引き締まった注ぎ口、ふくよかな曲線を描く胴、すっきりと整えられた基台など、抑揚をつけた形も大胆ながら調和に満ちている。黒漆で亀甲文が描かれており、アクセントとなっている。



重要美術品 菜桶 徳治2年(1307) 細見美術館蔵

寺院の食事の際に食物を運ぶために用いた器。本作には簡潔で力強い造形、朱漆と黒漆の色のコントラストといった根来の魅力が備わっている。提手の描くゆるやかな曲線や、朱塗りの菊座のフォルムには優美な趣がある。

徳治2年（1307）の銘を持つ菜桶は他に二例伝存しており、奈良・法華寺常什であったことが知られる。紀年銘のあるものとしても貴重である。



高坏 平安後期～鎌倉前期 細見美術館蔵

方形の盤面を持つ高坏。盤面は非常に薄く、基台はしっかりとした厚みがあり、支柱から基台にかけては細い円錐形を描いて美しい姿を成す。12世紀から13世紀の調度とみなされる。

高坏は古い形式の什器として知られる。平安時代の絵巻に高坏を使用している様子が描かれており、この頃には供物台や膳具として用いられていたことがわかる。

細見美術館



湯桶 室町時代 細見美術館蔵

東大寺伝来と伝える湯桶。たっぷりとした胴部と曲線を成す提手との均整のとれた姿、蓋や胴が描く大小の同心円など、卓越した木工技術による頑丈な造りの中にも心地良い美しさを備えている。寺院で僧侶や信徒のために用いられた漆器には、長い年月実用に供された器ならではの深い味わいと重厚さが感じられる。



細見古香庵 と「根来」

細見コレクションの礎を築いた細見 良（初代古香庵／1901～79）は、昭和10年代より「根来」の蒐集を始め、研究を重ねた。「私などは根来を見るたびに、長年の風雪と使用に耐えて、なおかつ美しいところに何となく声なき教訓を感じ、敬慕の念を禁じ得ないのであります。」（『日本美術工芸』285号、1962年）と語り、その風格と優美な佇まいに魅せられた。また、茶の湯の道具として積極的に用いることで新しい取り合わせを提案、その魅力を広く伝えた。昭和41年には『根来の美』（浪速社、1966年）を上梓している。



資料（画像）・取材をご希望の方は、ホームページリリースページもしくは左記QRコード「資料（画像）申込フォーム」からお申込みください。